



職員間の連携を強化 ケアの質の向上を実現

社会福祉法人 福祉楽団では、職員間の情報共有に Buddycomを活用しています。話す相手や場所を選ぶことなく、ボタンを押すだけで一斉に発信して話せるため、**若い職員から50代の職員まで誰でも使え、宿直のシルバー人材の方も使いこなす**など、施設内で好評です。

以前は、職員はナースコールを受けるPHSと、入居者・利用者の所在や移動を共有するための無線機を併用していました。無線機は大きく持ち歩きにくいため置きっぱなしになりがちで、結局PHSで確認の電話をすることになり、情報共有や利用者対応にとっても時間がかかっていました。

導入の決め手は2つありました。ケア記録の電子化でスマホによる業務効率化の効果を実感しており、さらに多くの業務をアプリ化できると考えていたこと。そしてもう一つは、災害時に配線が焼損するとナースコール連動のPHSが使えなくなるため、消防署の指導でPHS代替製品を検討していたことです。

そこで、4GやLTEでも使えるIP無線のBuddycomを選びました。導入後は**所在確認や連絡が迅速になり、職員の連携が取りやすくなって、ケアの質の向上につながっています。**



所在確認・申し送り・緊急対応から 防災訓練まで、BCP対策としても活用

主な使用機能



入居者の所在を全体で共有し 急変時も即対応

入居者や利用者は施設内を自由に移動できるため、所在を常に職員間で音声共有しています。急変時も「〇〇さんが急変なので集まってください」と一斉発信でき、内容が周囲にも共有されるため「酸素を持って行きましょうか」などその場で手分けして対応できます。夜勤帯はBuddycomを使うことで、担当ユニットを離れずに全員で申し送りを実施しています。

災害時にも使えるIP無線として BCP対策に貢献

災害時にはユニットの外へ利用者を案内する必要がありますが、Wi-Fiの配線が焼損してもモバイルデータ通信で使えるため、Buddycomを用いた防災訓練をBCP対策として実施しています。ケアコラボなどのアプリと併せてスマホをフル活用し、少人数で効率的に業務にあたる体制づくりにもつながっています。



導入前の課題

- ナースコール用のPHSと所在共有用の無線機を併用しており、負担が大きかった
- 無線機は大きく持ち歩きにくいため置きっぱなしになりがちだった
- 結局PHSで所在確認の電話をすることになり、情報共有や利用者対応に時間がかかっていた

ご担当者からのメッセージ



Buddycomを使うには、スマートフォンを導入する動きになっていないと始まらないですが、他にも様々な業務ツールをスマートフォンで利用できますので、とてもメリットがあると思います。



一番使っているアプリで、もはやBuddycomなしでの業務は考えられません。職員と直接話す機会はスマートフォンによって減りましたが、普段顔が見えないからこそ、直接会う会議の意義を再確認できました。



株式会社サイエンスアーツ

東証グロス:4412

www.buddycom.net